

# 豊かさあふれる隠岐の村里から

興味の趣くままに、地域の人たちとさまざまな活動を展開、いまでは体験民泊の宿の女将までこなす。そんな彼女が新たに取り組んでいるのは「物づくり塾」。手仕事の技を伝え、学ぶ場が広がるようとしている。

## 隠岐の 田舎での暮らし方

私は、隠岐島の最北端、景勝地「白島」（しらしま）にほど近い里で、田舎を逆手にとって、本当の意味での豊かで素晴らしい日々を送らせてもらっています。

もともと、隠岐の町部で生まれ育った私が、まるい島の反対側の西村地区に嫁いで来てから四〇年。当時、不便なところに嫁ぐ私に、少なからず同情する人もいたようです。しかし、ここで暮らしていても、自分らしく生活できることが一番大切だと思えば、花にたとえさせてもらえるなら山野草、

還暦を過ぎたいまは雑草のドライブラワーでしようか、隠岐の北の地で、新鮮な海の幸・山の幸をいただきながら、すこぶる元気に、あらゆることをこなしています。

子育てと商店、夫の議会活動を全部卒業したいま（店は町内の大型店との競争のあおりで、閉めたいところを夫が半日開けている）、わが家の片隅の小屋にやきものの窯を据え、かつての店のスペースには業務用の中古ミシンが二台デンと並んでいます。月に二組ほど、「民泊」のお客さまを別棟の古民家にお迎えしては素晴らしい交流の時間を持ち、ある時には採りに行けばいく

らでも手に入る山のツルでかご編みにいそしみ、寒い時には、こたつのまわりで布ぞうりづくり。四月に入ると、八重桜でつくる「桜茶」から始まる四季おりおりの保存食づくり。ほんやり過ぎせるのも田舎の魅力ですが、やろうと動けばしたいことだらけ。これらが全部できる身の幸せに、心から感謝せねばと思うのです。夫や、田舎でうまく生活する術を持ち合わせている性格にも恵まれているかもしれないが、私の場合、平成一六年秋、合併で隠岐の島町が誕生して新たに生まれた役場（なか）の中出張所の地域振興担当の方々とのかわりから、大きな飛躍をさせてい

ただいたのです。

## 後悔をおもしろみに 変えてゆく

もともと、町より少し離れている私たちの地区では、自分たちのことは自分たちでせねば、という習慣が身についています。県道沿いの竹やぶや雑草が嫌で、少しでも花に変えたいという無謀にも近い思いで活動を始めたのが平成一三年のこと。当時、自治会の環境福祉部委員としての私の発案に、部員の男性たちも楽しく賛同してくれました。しかし、植えるようになるまでに一年の時間が過ぎてしまい、こんなことではと、自分で「空き地に花を植えよう会」を発足させて代表を名乗り、大三島からUターンされた花に詳しい田中直子さんに副会長になっていただき、五〜六名に呼びかけて活動を開始しました。しかし、自分たちで挿し木したアジサイや、株分けしたアヤメなどの花を持ち寄るのは苦になりませんが、ボランティアの作業には限界がありま



ボランティア仲間との花の植栽。「だんだん券」を活用した取り組み。

す。私のつくるおでんや、シンジュースでは慰め切れない疲れがありました。それまでの、ボランティアの崇高な

精神に対する思いに甘さがあつたと痛感しました。三ヶ所目の白島への入り口を花壇にするころには、後悔し始めていました。その頃のこと、中出張所に異動して来られた岡田清明さんが、「緑の募金」(注1)や県の「ハートフルロードしまね」(注2)から交付金を受け取るために駆けずり回って下さったのです。まさに助けの神でした。彼は自分も玉の汗をつねに額にちりばめている人で、この汗に私たちも随分突き動かされたものです。何せみんなはともにも機嫌よく作業をするようになり、田中さん以外はほとんど草刈り機を使う彼女たち、ブイブイと道路脇の雑草を舐めるように刈り込んで「土井のした所はすぐわかるわ」などと、私の少々虎刈りの所をやり直そうとす

る。「ゆくゆくはアジサイを植えるからいいのー」とストップをかけますが、皆さんが責任を持ってやってくれることで、あせりの気持ちも軽くなり、嬉しいことでした。

「ハートフルロード」の交付金は一年後に入るため、とりあえず「地域通貨」を出張所で作ってもらうことに。一時間の作業に対して一枚五〇〇円の「だんだん券」で支払うのです。最初は何やら冗談めいておかしかったのですが、その券がうまく私の元に回収されてきはじめるとさまざまヒントが湧いてきます。この券で私のつくった花瓶を買いたいとか、白地で縫ったのれんにブドウの絵を描いて欲しいなどの話になり、逆にのれんの縫い賃にその券で私が払うという、券が循環するおもしろみを味わいました。そんなことから、岡田さんたちが地域の活性化のために計画する「ゲンキ市」などのイベントには、皆で一丸となって参加するようになったのは言うまでもありません。

## 人生最高の時を 過ごしている実感

一昨年の「春のゲンキ市」では、わが家の古民家をお茶席の会場として提供することとなり、客寄せの販売作品となるのれんや、ツルかごづくりに必要な力を合わせてくれ、結局一八枚のお抹茶の券がさばけたのです。庭には、桶や瓶や大かごに野や山の花をふんだんに飾り、家の中では赤い毛氈に琴のCD「春の海」の音色の流れるなか、田中さんのお弟子さんである和服姿の中学生により次々とお抹茶が運ばれます。メンバーはかごやのれんを売りさばき、私はただニコニコと、ほとんど顔見知りの隠岐じゅうからおいでの方々を着物で応対する、思いもよらぬ女将さん体験となりました。西村のこの地でこれだけのことができたことに、Uターンの田中さんと二人で心底感動し合ったものでした。そしてまた「こんな汚くて古い家に人を呼ぶほど私は自信過剰じゃありませんよ」な

どと、岡田さんに眼を剥いていた私だったはずなのに、すっかり自信過剰になって現在に至っている自分が少々不思議です。

次々とあらゆるイベントに参加し、新たにやきもの志望の人たちが加わり、「土産物としてのやきものを誰かがすればいいのに」と思い続けてきた私にさらに仲間が増え、ふるさと島根定住財団の「チャレンジ事業」(注3)に申請するチャンスが訪れました。平成二年より町内にある「陶美会」に入会して始めた陶芸活動、当時はこんな素晴らしい作品を隠岐の女性がつくっていることに感動して、ベテラン揃いの方たちの仲間に紛れ込んでの作陶でした。九年より中村中学校の「やきもの教室」の指導を依頼され、一五年から五箇デイサービスでの「リハビリ陶芸教室」の指導も始め、車椅子などの方たちからとても生きがいにしていただいています。

以前から思い続けてきたことは、やきものを中心とした「ヤブランの会」



「ゲンキ市」は地域の商品開発のマーケティングの場にもなっている。

「バリコレ ムラコレ ナニコレショー」は古着のリニューアルファッションショー。スーパーモデルは地元の中学生から70歳代まで幅広い。



を結成して「チャレンジ事業」への挑戦でした。さまざまな方々にお世話になり、みんなの努力での結果、一七年夏、助成金を獲得することができました。そして、やきものの窯を入れたのです。それまで、素焼きや本焼きのたびごとに、みんなのつくったものを町中まで壊さないように運んでいたのです。もう本当にすべての人に感謝しているほど嬉しく、またここから人生が大きく変わりました。手ごろな大きさの窯は、月に二度ほどのペースで焼成。マイコンなのでつきつきりでなくてもよいのに、ワクワクしながら何度も見に行くのです。しかもまた、幸せなことに窯に行く途中、わが家の庭から海が見えるのです。こんな時なのです、私がいま、最高の人生の時を過ごしていると感じるのは……。

しかし「チャレンジ事業」としての収益もあげねばならず、やきものや「ゲンキ市」などの収益だけでは間に合わず、事業としてのノルマは「民泊」の方で頑張ることとなりました。「民

泊女将人生」が平成一七年九月からスタートしたのです。しかしやってみると大変に楽しい仕事。わが家にお泊りの方々とのかわりがとても素晴らしく、中村の「さざえ村」(注4)と一緒に食事をとり、隠岐の観光地ではない場所での感動や、さまざまな発見についての会話も弾み、嬉しくなっています。むしろ、私たちが当たり前にしていることの豊かさに気づかされるのです。

「さざえ村」と連携し、外で夕食をとってもらうことで、そのぶん私に余裕が生まれ、家を磨き、花を活けることに専念でき、お客さまと「さざえ村」メンバーとの交流がとても好評となっています。体験としてのやきものの葉っぱからできる皿は、簡単につくれて完成度が高く、後から釉うぐりをかけて本焼きして送ってさしあげるとたいそう喜ばれ、なぜか親戚みたいな関係になります。布ぞうりのほうは、二時間以上もかかるので、ゆっくりできる方は感激されているようです。



古民家が「布ぞうりづくり」の体験施設となる。体験メニューはまだあります。

古民家「幸」でお出迎え。手づくりの品々でもてなします。



## すばらしい仲間たちと開催した フアッションショー

おかげさまで、民泊スタイルの古民家「幸」も一年半でお客さまは一〇〇人を超えました。昨年一二月初め、中地区で「武良(注5)発 あつたか寄席」が開催された際、わが家にお泊り下さった落語家・露の新治さんと腹話術師の千田やすしさんがちょうど一〇〇人目にあたり、二人分の布ぞうりをつくり、「さざえ村」の交流会の場で少しオーバーに贈呈いたしました。あまりのタイミングの良さに「ホントに一〇〇人目かの？」などと言われましたが、本当に記念の九九人目と一〇〇人目だったのです。

かくして、ちょうど良いペースの民泊のお客さま、花壇、やきものなど、家のこともこなせ、余裕もあります。しかし、留まることを知らない私たちは、平成一八年四月の異動で岡田さんに替わって着任された坂嘉文さんの鶴の一声で、秋のイベント「白鳥産業祭」での「リフォーム服のフアッションショー」に挑戦することに。

手元にあった緋かすりの反物がきっかけだったのですが、手仕事の達人である吉見先生に教えを請いながら、すぐに作務衣ができ、おしゃれな人が島外から購入して着ておられる着物地でできた服のなかから真似していいものだけをお借りし、それぞれパターン(型紙)をとって参考にしたがり、うわさを聞いて洗い張りした昔の着物の反物を持って来て下さった人もいました。「これはこうした方がいい」とお互い出し合うアイデアも心強く、面白いほど次々に作品ができ上がります。農繁期だった関係で、洋裁の腕のある人が忙しく巻き込めませんでした。原型を取ってパターンもたくさんできると、もう服など買う必要がないと思えました。学校の家庭科を出たほどの洋裁の腕が私にもついていたのです。

これまた坂さんの「さざえ村のユニフォームもつくったら？」と言う鶴の一声で、さっさと取り掛かる「さ

織り」のグループ。うらやましいほどの流れ作業で八枚の素敵なエプロンとバンダナ、「さざえむら」と描いたのれんまでできたのです。かくして実現された白鳥祭のフアッションショー「パリコレ、ムラコレ、ナニコレショー」は大盛況となりました。

グループ「ポレポレ文化村」(注6)の水原くんたちの振り付けや音響、都会でショーの経験があるというUターンして来たばかりのももちゃんの演出が、私たちの未熟な服を素晴らしく見せてくれたことに感動しました。さらには、地域の方や、中村小・中学校の校長先生をはじめ教頭、教員、生徒の皆様さんによる都合三〇人の「スパーモデル」の人たちです。男性もメーカーがとてよく似合っており、なぜか大きな笑いまで取っていました。

「武良」の地で、ここまでやるとは思ってなかったにちがいありません。しばらくの間、「見たかったのに、素晴らしかったらいいね」と、とくに町部の人の間で評判になっていたように

す。しかし、私はその後「関わってくれた皆にどう感謝の気持ち伝えようか」と悩みました。自治会も予算がありません。もちろんには、私がもらった花束をなぜその場ですぐあげることに気づかなかったのかと、自分の鈍さが悔やまれます。役場の坂さんが全員にDVDやビデオを配ってくれ、ほんとにしました。いまでは、達成感とともにそのビデオは私たちの宝ものとなっております。

## 「匠」が集う 「物づくり革命」を

いま、ショーでの服を売って欲しい、私にやきものを習いたい、布ぞうりづくりを教えて、とよく言われます。島じゅうに同じ思いを持つ人がたくさんいるようです。

私も、習いたいことはまだまだたくさんあります。一緒につくったり習ったりしながら、売り物をつくる集団が生まれないものか。あれだけのショーをこなした人材がもつたない……。

そこでまた新しい発想です。坂さんが一枚八〇〇円相当の素敵な「幸塾券」をすぐつくって下さったのです。それを三枚ずつ入会費として購入していただき、一枚ずつものづくり指導をします。それぞれの分野の「匠」が講師となるのです。布ぞうりは完成までのお手伝い、やきものだと一キロ分の土代と焼くまでのお世話、そして一緒に洋裁。意外と素敵なこのアイデアは、もうすでに好スタートを切っています。隣の布施地区から二人で布ぞうりづくりにいらっしやったり、従兄弟夫婦と大学生が三人で来て、やきものと布ぞうりの両方をこなして帰り、たいそう喜ばれたとか。時間はあるのに物づくりが嫌いだっただいたターンの方が布ぞうりづくりを体験され、「今度はミシンを教えて」と来られることになっていきます。半天の綿入れは、坂根さんに習おう。洋裁のプロの人を招きたい。人と人とのつながりがどんどん広がる予感がします。物づくりをしていると仲間が欲しくなるものです。お互いに共

鳴して、ワクワクしますから。

また、私たちがいきいき楽しく「物づくり塾」を続けることにより、これから島へイターン、Uターンして来れるであろう方たちを受け入れる手段となるばかりか、それらの方々が「匠」である可能性も高いということに気づきました。

八〇歳半ばを超えられた手仕事の師匠・吉見先生は、お邪魔するたびニコニコワクワクと惜しげもなくあらゆることを教えて下さいます。いま、私は彼女を目標にしています。手仕事をしてワクワクしていれば、何歳になっても素敵な表情でいられるのだと。

最後に付け加えておきたいことがあります。私がこうまでいきいきしていると、「パートナーはいったい……」と思われるのではないのでしょうか。彼は、晴耕雨読の言葉通り、荒れた日にはうらやましいほど本を読み、晴れた日には山へ行き「何本手入れた」と達成感にあふれた顔でもどつて来る、根っからの林家者です。「島の自然を

守るのが地域振興のはずなのに、松枯れにはなすすべもない」と政治の非情さを嘆きつつ――。

注1 「緑の募金」…国土緑化を目的に昭和二五年に始まった「緑の羽根募金」が「緑の募金法」(平成七年制定)によって「緑の募金」となった。募金活動を実施した市町村単位の募金団体へ交付金が還元され、森林整備や公共施設の緑化に使われる。

注2 「ハートフルロードしまね」…島根県の道路維持ボランティア制度。県・市町村の支援のもと、実施団体に認定された地域住民が県管理国道・県道

の清掃や草刈りなどを行う。県が傷害保険の加入手続や保険料を負担、草刈り活動の実費相当額を交付。希望により実施団体名を記した表示板を設置する。

注3 「チャレンジ事業」…(財)ふるさと島根定住財団が実施する「しまねづくりチャレンジ事業」(取り掛かり支援。民間団体やグループが地域の元気づくりに向けて継続的な活動(イベントや調査研究など)を進める場合の立ち上がりに対する支援。助成率は二分の一以内(一〇万円以上五〇万円以下)。平成一七年度「民泊と陶芸による中村版体験型観光の創出事業(ヤブランの会)として採択された。

注4 「さざえ村」…隠岐島の北端、中村にある地場産品の販売加工拠点。平成一五年、地元有志で

旧中村漁協の経営から分離独立、アゴ(トビウオ)を加工したダシの製造、食堂では近海で獲れたサザエやイワガキなど使った料理を提供している。一八年「隠岐の島づくり株式会社」として会社登記。

注5 「武良」…隠岐島の北東部に連なる西村・湊・中村・元屋・飯美地区の総称。承平年間(九三―一三三)編纂の『倭名類聚抄(わみやうるいじゅうしよ)』に「武良郷」とあり、隔年一〇月にこの地区で催される「隠岐武良祭風流(おきむらまつりふうりゅう)」(県指定無形文化財)は隠岐三大祭りの一つとされる。

注6 「ポレポレ文化村」…隠岐島内の休耕田でヒマワリの植栽、朝市への出店、道路のごみ拾いなどを続けているグループ。

## おきどうご 隠岐島後 data

島根半島の沖合に位置する日本海の島。隠岐諸島のなかでは最も大きい。面積241.58km<sup>2</sup>、周囲211km、人口16,972人(平成19年1月現在)。漁業を基幹産業とし、農業では稲作、葉タバコ、豆類などを主としている。暖流と寒流が合流する島でもあるため、北方系、南方系の植物が混生。独自の生態系を活かした観光産業にも力を入れている。平成16年10月に島後4町村が合併し、「隠岐の島町」となる。



## 土井幸子(とい ゆきこ)

島根県隠岐の町部で生まれ育ち、島の反対側(西村)に嫁いだ昭和18年生まれの自称「スーパー女将」。ひらめけば、なんでもやってみないと気が済まない。若い頃から物づくりをしたり、習いごとをするのが大好き。じっとしているのが嫌いで、平成17年からは体験民泊の宿「古民家 幸(さいわい)」を始めた。